明窓淨几

# ハインリヒ、ハイネ（一）

棚々生

十九世紀思想の潮流は、厭世の新傾向を呈せるものに似たり、哲學に在ては、ショペンハワー氏始めて指を印度哲學に染めて『欲及想としての世界論』に、近世厭世論の破天荒たりしより、ハートマン氏その無意識論に之を祖述し。詩に在ては、英のバイロン、沈痛の語に人生の悲哀を歌ひ、獨のハイネ、峭刻の筆に世俗の烏滸を罵る。

流泉嗚咽し、落木悲涼たり、物豈に鳴を好まむや、必ず平ならざる所以の者あればあり、放臣澤畔に行吟し、遺客蘆中に向て浩歎す、人涙多きに非ず、振て痛を極むるに緣る、蒼旻は無情なり、人を運命の手裡に委ねて顧みず、世途は嶮巇あり、石磊々として蒿蹇々たり、人間五十、何の爲めに生れて何の爲めに死す、目に見へぬ傀儡師の、引く糸の操るまゝに斗筋、掀翻、踊りつ、舞いつ、或は泣き、或は笑ひ、或は怒るその間に、一生は夢と過きて、殘る重荷を双肩に擔ふて、墳墓へ急く果敢なさよ。苟々營々の走肉行屍ならはいざ知らず、深く人生を味はゝ、誰れか斯世を辛酸に非らずと云はむ、兎角斯世は馬鹿の極樂文明も開化も皮一枚上、假面を被つて仁義禮讓、臟腑を照す鏡あらば映する影の如何に淺ましかるへき、多情多感の詞人騷士が、斯世を哀觀するの多きも其所由あきに非らざる也。ショペンハアー氏曰ふ In welchem der Genius lebt, leidet am meisten.

彼のハイネ、詩人中の最も詩人的の情性を有して、而して人生中最も苦慘の人生を味へり、されは、滿肚の牢騷發して詞となる、其詞悲壯沈痛の氣を帶ひざらんと欲するも得べからざる也。もし彼をして、稍平靜の生涯を享くるを得せしめば、其憤世此の如きに至らじ、然れども亦之れあかりせば、叙情詩人として彼の如きの地位を得る能はざりしかも未た知る可らず、その自から謂へる如く、『心中に傷みあるは好詩の成る所以』なれは、その



『日本人』第8号。明治27年（1894年）2月。

如くそれ遲々たり。彼が文學の隆且盛なるに比すべくもあらず。之を要するに儒教の勢力は其最大因に屬す。儒の道たる躬行實踐を尊び、世道人心に益あるを奬勵す。虛中實を見はし、無理有を生ずるが如き小說戲曲は自から其鄙む所となり。實際的傾向を有する北方人種思想の風潮は滂薄として上下古今禹域全土に洽く、小說戲曲は永く、其下に壓伏せられぬ。

黑龍江頭の一部落勃然として風を起し、雨を呼び、驚天動地の活劇を支那中部に演じて禹域を一統したるは獨り支那史上に一新面目を開きたるのみに非ず。支那人種思想の上にも亦一大變動を起せり。制度文物又古の制度文物に非ず。小說戲曲の頓に發達したるもの亦其餘勢に外ならざるなり。樂府の變じて詞餘となりたるもの此に至て戲曲となり、俗文體を以て長篇の小說を作り、支那の小說戲曲是より觀るべし。

然れども儒教の影響は永く泯びず。孔云亭其桃花扇に敘して曰く、傳奇小道なりと雖凡そ詩賦詞曲四六小說家體として備へざるなし。鬚眉を摹寫し、景物を點染するに至ては乃ち畫苑を兼ね、其旨趣實に三百篇に本き、而して義は則ち春秋。用筆行文は又左國太史公なり。以て世を警め俗を易へ聖道を贊けて王化を輔くるに於て最も近しと。是を以て第一義とす。感化我國に及で作者の思想其繫縛する處となれるや久し。

元以前の小說は云ふに足らず、然れども彼が小說の發達進歩の跡を見んとすれば須らく其始に遡らざるべからず。略其發達の遲々たる所以を敘ふ。敢て讀者の爲にするに非ず。

（完）

# 厭世詩人ハイ子

田岡嶺雲

古より詩人多く數奇、天それ其造化の秘を泄らすを怒る乎、將たまた之を奇厄に陷れて其才を試みんとする乎。或は『詩は能く窮人、其實を究む』といひ、或は『詩は窮して、語更に工なり』といふ。詩人必ず窮するか、抑もまた、窮して而して詩ある乎、嗚呼詩人多感の資を以て、多く苦慘の境に處す、詩人は天の寵兒か、將たその讒臣か。

嗚呼、ハインリヒ、ハイネ、渠は詩人中の最も詩人的なる性情を以て、而して人生中の最も酸辛なる人生を味へり。されば滿肚の牢騷、發して詞となる所、其詞悲壯沈痛ならざらんと欲するも得んや、もし渠をして、其生涯僅に平靜ならしめば、其憤世それ或は此の

# 日本におけるハイネ研究　I　田岡嶺雲のハイネ論

伊　東　　勉

田岡嶺雲が詩人ハイネの生涯，思想，性格を日本にかなりくわしく紹介した最初の人であった。かれは明治二十七年（1894年）に栩々生というペンネームで雑誌『日本人』第八－第十二号に『ハインリヒ・ハイ子』という評伝を，つづいて明治二十九年（1896年）に田岡嶺雲というペンネームで雑誌『太陽』第二巻第二十三－二十五号に『厭世詩人ハイ子』という評伝を発表した。ここではまず第一論文『ハインリヒ・ハイ子』を検討しよう。

田岡嶺雲はこの論文をかくにあたって William Sharp, *Life of Heinrich Heine*, London 1888. によったといわれている。たしかにシャープのハイネ伝は藤浪水処，生田春月などの大正時代（1912－1926年）のハイネ研究者にいたるまで，日本人のハイネ理解にかなりの影響をおよぼした。嶺雲もこのハイネ論をかくにあたって，シャープのハイネ伝から多くのことをまなびとった。シャープの文章をそのまま日本語に移している個所もある。たとえばシャープの『ハイネ伝』第三章には次の文章がある。

〈There is indubitable reason for Goethe's criticism, but he never became sufficiently acquainted with Heine to perceive that the cynicism and mockery were as the bitter rind to the fruit whose deep-set core was fresh and sweet. At heart, the sweetest singer of Germany was as manly as Burns, as blithe as Béranger : but life meant for him Protest, and the deafness of the world to protest invited cynical recklessness ; and burning pain and lightsome emotions, passionate hopes and wayward impulses, wrought havoc of the fair dreams and purest aspiration of early youth. (Chapter 3, p.77)〉

嶺雲はこの英文を部分的には直訳し，補足と省略をおこなって，つぎのような立派な日本文にしている。

「ギヨェテも亦能く吾詩人を知り得たる者にあらず，ハイネが痛罵を逞ふするを以て，世を愛し人を愛せずといふこと勿れ，是れ果の甘鮮なる肉核を包める苦皮なるのみ，彼は実にバーンズが侠を有し，ベランゼルが快活をそなへたれども，四囲の境遇は，彼を逆流に推し下し，而して世界は聾として彼が叫号をきかねば，其叫号は変じて忌憚なき熱罵となり，其燃ゆる如き苦悩はその軽快の情をやき盡し，逆運的の感慨は熱意の希望を閉塞し，ついに滿腔の不平淋漓，漏れて筆端の機刺となれるのみ。」

ている。そのドイツ語原文の一部分はつぎのとおりである。

〈Ich habe oben mit besonderer Absicht angedeutet, in welcher Periode der "Atta Troll" entstanden ist. Damals blühte die sogennante politische Dichtkunst. Die Opposition, wie Ruge sagte, verkaufte ihre Lieder und ward Poesie. Die Musen bekamen die strenge Weisung, sich hinfüro nicht mehr müssig und leichtfertig umherzutreiben, sondern in vaterländischen Dienst zu treten, etwa als Marketenderinnen der Freiheit oder als Wäscherinnen der christlich-germanischen Nationalität. ···· Ich erinnere mich eines damaligen Schriftstellers, der es sich als ein besonderes Verdienst anrechnete, dass er nicht schreiben könne; für seinen hölzernen Stil bekam er einen silbernen Ehrenbecher.〉

この文章を嶺雲は，不要な一文を省略して正確に達意の日本文に訳している。

「予のアッタ・ツロルを作りし時は，恰かも所謂政治的の詩なるものの真盛りなりし，彼の愛国者と自稱するの徒横行して，騒神は此輩の為めに，其行の浮躁に且傲慢に流るゝを戒められ，且祖国的なれよと忠告せられたり，此輩は騒神を要して，自由軍のもの売りとするか，又は独逸耶蘇教国々粹の洗濯婆となさむことを欲せしなり，当時の作家と稱するものは，作り得ぬといふことを寧ろ名誉なりとし，その蠟を嚼む如き文章を作りし表彰として，黄金杯を得たりき。」

この『アッタ・トロル』の『序文』の一部を嶺雲はドイツ語の原文から日本語に翻訳したと推測される。嶺雲がかれのハイネ論をかくにあたって利用したバウリングの英訳ハイネ全詩集の1901年版には『アッタ・トロル』の詩の全訳はふくまれているが，散文でかいた『序文』は省略してあるからである。また，*Atta Troll and other Poems* by H. Heine, London 1879. という英訳本が当時，存在していたけれども，この本に『アッタ・トロル』の『序文』まで訳出してあったか，またこの本を嶺雲が入手して参考にしたかどうか，今のところわからないからである。

とにかく田岡嶺雲がシャープのハイネ伝には見いだされないハイネ自身の文章をドイツ語原文あるいは英訳文から日本文に翻訳して引用し，かれ自身のハイネ論を展開していることは，上記の二個の例によってあきらかである。

さてシャープのハイネ観を簡単に紹介しよう。H. G. Atkins, *Heine*, London 1929. には，十九世紀後半のイギリスにおけるハイネ導入について，つぎのような適切な概観があたえられている。

「イギリスにおけるハイネの人気は大したものである。けれども，その人気は主としてハイネの初期の詩にもとずいているのであって，かれの生活と性格についての本当の知識はほとんどともなわないものである。一般的にいって，ハイネの生活は，かれの詩についての観念と調和するようにセンチメンタルなものにされてきた。これはシャープの才気あふれる，想像力に富む即興的なハイネ伝についても，大体としていえることである。その反面においてマ

シュー・アーノルドは，れいのもったいぶった文体で政治的社会的観点から，ハイネについての一面的な見解を提供している。こうして，自分のにくむ俗物たちをうちのめす鞭としてハイネを利用しているのである。(Chapter 12, p.253)」

このようにイギリスにおいて主としてハイネの初期の詩がとりあげられ，ハイネがセンチメンタルな詩人とみなされていたことは，明治三十年代（1897－1906年）の日本におけるハイネ理解にもかなり影響をおよぼした。

シャープはアーノルドの『ハイネ論 Heinrich Heine (1865年)』を,「ときおりは不正確で不十分ではあるが立派な論文（Chapter 8，p.201)」とよんでいるが，この先輩のハイネ観をとりいれている。すなわち，かれはアーノルドとともに，ハイネを束縛から人間を解放しようと努力する詩人と見なして，こうのべる。

「解放！　これはハイネにとっては前進 Vorwärts と同意語であり，気まぐれではあるが見事な，すべてのかれの突撃におけるスローガンであった。すべての抑圧された人民と種族の解放，全世界の，そしてことにまずヨーロッパの解放……（Chapter 8，p.106)」

これと関連してシャープはハイネを合理主義者と見なす。理性はハイネにとっては「かれの生活の不幸な情熱 passion malheureuse of his life」である。ハイネを汎神論者とは呼んでいないが，「かれ自身もわからないし，解明しようともしない至高の力 Supreme Powerを信じる人間（Chapter 8，p.205)」とシャープは見なしている。ここまではアーノルドとシャープとの意見は一致している。

けれどもアーノルドがハイネの近代性を，この詩人がヒュマニティー解放のための戦士であるという点に見いだすのにたいして，シャープはそれを，この詩人が人生を熱愛して，人生のよろこびと苦悩をうたいあげた点に見いだす。それゆえにハイネは「人間の歴史において精神的にもっとも騒がしい時代のひとつの典型的代表者として，後世にのこるにちがいない（Chapter 8，p.203)」とシャープはいうのである。

「おそらくは真の弱点は，ハイネが人生を愛しすぎたということである。ハイネは人生の奴隷となった。奴隷として人生を礼拝し，人生に平服して，奴隷の遺産である冷笑と侮辱にであった。（Chapter 8，p.209)」

「ハイネの歌のモチーフについていえば，それはまず第一に，かれの人生のよろこび his Lebenslust, his delight in life であったと，私はいわなければならぬ。その愛ははげしく人間的なものであるから，ほとんど必然的に神性を無視せざるをえなかった。かれの天才は光彩陸離たるものであったが，かれ自身は大地の被造物であった。(Chapter 8，p.203)」

「ハイネはかれの最良の作品においては，制御された衝動の被造物であり，最悪の作品においては，制御されない衝動の被造物であった。この両極端を通じてハイネは芸術の中庸を獲得した。この点にかれの弁明（apologia）がある。ハイネはかれ自身によって判断されなければならないのであって，もっとも公正な裁定者といえども，ハイネ自身のもうけた枰の平

衡を実質的にさまたげることはできない。(Chapter 8, p.204)」

ここに引用した三個の文章こそ,シャープの妻のエリザベスが,かの女の『シャープ伝 *William Sharp* (*Fiona Macleod*) by Elizabeth A. Sharp, William Heinemann, London 1910. 』において, 良人のハイネ観の真髄として強調しているところである。

シャープによれば, ハイネは人生を熱愛し, 人生にたえず裏切られる感情的衝動的な詩人であるから, 思想家としては首尾一貫していない。ハイネの最良の論文である『ドイツ古典哲学の本質』や『ロマン派』も, シャープの目からみれば, 壮麗な序説 commencements であって, 結論が欠けている (Chapter 8, p.207)。『イタリア紀行』においても ハイネには歴史的考察が欠けている。それは「思想家というよりは激昂した感情家の言辞にすぎない (Chapter 5, p. 125)。」それゆえにハイネの風刺は往々にして「個人的憤慨」の暴発にすぎないことがある。

「ハイネの辛辣には, しばしば精神の卑俗な貧困がいささかふくまれていた。かれは刃のするどい風刺の剣を, 暗殺者やからいばりをする人間としてではなくて, 熱狂的な無謀な偶像破壊者としてふるった場合がもっとも多かった。けれども, かれは時々は棍棒をひっつかんで,典型的なユンカーの無器用な乱暴で,それを威勢よくふりまわした。(Chapter 3, p.77)」

ハイネは思想家というよりは, むしろ感情的衝動的な詩人であるという見解から, シャープは,「ハイネには才能はあるが節操 character はない」という当時ヨーロッパ, ことにドイツに流布していた偏見にちかずいていく。もうひとつだけシャープの言葉を引用しておこう。

「かれ (ハイネ) はユダヤ教を拒否した。キリスト教を拒否した。サン・シモン主義を拒否した。超越神論を拒否した。無神論を拒否した。共和主義者であったから, 君主主義を拒否した。そのあとでただちに共和主義者の大部分を拒否した。その理由は, それらの共和主義者が, せりふの変更に無関心であって, にんにくの匂いがするからというのであったらしい。人類解放の戦士でありながら, かれは自分の進撃を代理人にさせる道をえらんで、かれ自身には頻繁な, そして無期限の賜暇をゆるした。一言にしていえば, かれはスコットランド人の言葉をかりていえば,『利巧(canny)』ではなかったのである。(Chapter 4, p.140)」

ここで田岡嶺雲のハイネ論にもどろう。嶺雲はハイネの生涯をのべるにあたって, シャープのハイネ伝の敍述の順序にしたがっている。けれども, ハイネが感情的衝動的な詩人であって, 首尾一貫していないで, しばしば無定見におちいるというシャープの見解は採用していない。シャープは, ハイネは人生を熱愛したのに, 人生はかれにたいして冷酷であったから, この天才詩人の絢爛無比の詩が成立したという。嶺雲は詩人ハイネのヒューマニズムと人世, すなわちハイネをとりまく社会との矛盾を, つぎのように具体的に説明する。

「身窮語更工と。詩人たるか故に窮するか, 窮するか故に詩人となるか。ハイ子の一生を通じて, 経となり, 緯となり, 以てその苦惨を織出したるもの三, 曰くその猶太種なること, その恋の失望, 晩年の病苦。」

ハイネの失恋をくわしく説明するために, 嶺雲はシャープのハイネ伝にはみいだされないバウ

リング訳の恋愛詩を四個も引用する。ユダヤ人迫害については，それがハイネの矯激の原因となったことを，嶺雲は結論の部分でつぎのようにのべている。

「試みに汝をして猶太種の間に生れ，而してハイ子が天才と抱負とあらしめて，而して汝を十九世紀初期の独逸に生れしめよ，而して其同胞の凌辱圧抑の下に蠕動する無告の民たるを見，且つ自らも其麺包を得むには其精神を売って改宗せさる可らざらしめよ，汝をして食い飲み且嬉楽して其能事畢れりとせば，則ち不知，汝が身中一滴の熱血を存せば，寧ろ能く矯激するなきを必する乎。」

ユダヤ人迫害にたいする憤激はプロイセン王国の専制政治にたいする憎悪となる。七月革命勃発前にすでに，ハイネの「普魯亜に栖むを厭ふの情は彌々切になりゆきしに似たり」と嶺雲はかいている。さきに引用しておいた，ドイツ語原文あるいは英訳文から日本文に訳出された『告白』の一部分も，ハイネのプロイセン王政にたいする嫌悪を示すためのものである。なおハイネのフランスへの亡命に関連して，嶺雲はブールボン正統主義の王政（1814－1830年）と七月王政（1830－1848年）との相違を指摘して，するどい史眼をしめす。つぎの嶺雲の文章は，シャープのハイネ伝にはまったく見いだされない。

「然らは佛は如何。ブルボン家が君臨する間は玆に去るも，其危険は独に在るに減せさるべし，何れを捨てて，何れをか取らむ，其心は迷ふて決せざる折しも，今や佛七月の乱によりて，ブルボン家顚覆し　ルイヒリップの立憲王政となりたれば，されはこそ遂に巴理に移るの意を定めたるなれ。」

ハイネの晩年の病苦については，嶺雲は主としてシャープの敍述にしたがって，左眼の失明から全身の麻痺にいたるまでの経過をくわしく説明する。mattress-grave, ドイツ語では Matratzen-Gruftに「褥墓」という訳語をあたえたのは田岡嶺雲である。

詩人ハイネと人世との矛盾を漠然と抽象的に愛情と冷酷の対立と理解するシャープは，この詩人を，無定見におちいりやすい衝動的な感情家にしてしまった。ところが，ハイネと人世との矛盾をユダヤ人迫害，失恋，そして晩年の病苦として具体的にとらえる田岡嶺雲は，この詩人をヒューマニティーを実現するために，これらの苦難と死ぬまで戦いぬく不屈の戦士とみなしている。この点において，嶺雲はシャープの「即興的」幻想的なハイネ観を克服している。

「ハイ子は生命の園を囲める壇上に垂れたる，死の黒き果実を恣ままに摘むことによりて，その自からを愛せる者を悲しみに陥らしむるが如き，弱志の者に非ず，彼は巍然として運命と戦へり，彼は全く勝算なきを知るも，猶敢て降らず，一歩また一歩之が為に追及さるるも力盡き矢折れずばやまず。」

「彼を以て愛の心なしといふ莫れ，彼は愛の為めに活きたり，彼は愛の為めに泣き，愛の為めに笑へり，彼は神を蔑視するまでに人間を愛せり，人世を厭ふまでに人生を愛せり，其墳墓の地を捨ててまでに，自由を愛せり，彼は自由の為めに戦ひ，ヒューマニチーの為めに戦へり，彼は全世界の人間を壓抑の羈靮より釈放せむことを期せり。」

ヒューマニティーのための不屈の戦士としてのハイネを日本に紹介するために，田岡嶺雲はシャープのハイネ伝を十分に利用したにすぎない。こうした正しいハイネ観に到達するために嶺雲はこの詩人の著作をみずから徹底的に研究したにちがいない。ところが明治三十年代にドイツ文学者の登張竹風がこの嶺雲のハイネ観とおなじ見解をのべているので，それをつぎに紹介しょう。

明治三十四年（1901年）に藤谷崇文館から刊行された尾上柴舟の訳詩集『ハイネの詩』は，その後の日本におけるハイネ理解に重大な影響をおよぼした。登張竹風はこの訳詩集に簡潔な序文をよせている。かれはまずハイネへの自分の愛情をのべて，この詩人が苦難の生涯をおくったことを強調する。

「余は独逸の詩人中，最もハイネを好むものなり。その一生は辛酸数奇を極め，殊にその晩年の境遇の如きは，殆んど人をして悲痛の念に堪へざらしむ。ハイネの詩ここにおいて愈々益々観るべし。」

つづけて竹風は「而して冷罵百出諧謔縦横の快腕に至ては，独逸文学史を通じて，全くその比を見ざるところなり」とのべて，ハイネを風刺詩人としてたかく評価する。尾上柴舟のこの訳詩集『ハイネの詩』もそれにおおいに寄与したのであるが，ハイネをセンチメンタルな詩人と見なす傾向が明治三十年代の日本では圧倒的であった。橋本青雨の『詩人ハイネ』は，この詩人の忖情詩にはふかい理解をしめしながら，風刺詩はほんものの詩ではないとしりぞけている。青雨は，ドイツのいわゆる政治詩人をハイネが風刺している長篇詩『アッタ・トロル』については，「是れ厳正なる意義においては詩と謂うべからじ（156頁）」としているし，ハイネの政治的社会的風刺詩の最高の傑作である長篇詩『ドイツ・冬物語』についても，「こもまた前者（『アッタ・トロル』のこと――伊東）と同じく純然たる詩として看るべきや否や頗る疑はしく，多くの評家は否定に傾くものの如し（158頁）」とのべている。このようにハイネの風刺詩を否定しようとする時流にさいして，登張竹風がハイネを風刺詩人として稱揚したのは達見である。

尾上柴舟の『ハイネの詩』には，この詩人の略伝がそえてある。この略伝の作成には登張竹風も協力したであろうと推測される。この略伝には，ハイネのうけたユダヤ人迫害についてはほとんどのべてないけれども，結論の部分において，ハイネの散文が政治的社会的抑圧にたいする戦闘であったことが，つぎのように力説してある。

「彼れの文を草するや，ただ，漫然，筆を下すにあらず。必ず，確然たる目的を以て，之に従へり。乃ち，彼れは，世界，殊に，独逸の社会的，政治的状態に満足せざりしを以て，あらゆる形式に於ける，政治的束縛に向て，戦闘し，破壊するを，其終生の目的とせしなり。而して，彼れは，この戦闘に従事するに，人間の用ひ得る最鋭の利器を以てし，尤も勇敢に，尤も大胆に格闘したり。」

明治三十八年（1905年）九月に発行された『中学世界』定期増刊の『世界三十六文豪』のなかの論文で，登張竹風はハイネを日本人に紹介する。この論文で竹風はまず，ハイネが世界的名声を得ていることをあきらかにする。つぎにハイネにくわえられている非難をとりあげて，論駁す

る。第一はハイネが「悪口罵詈」をほしいままにするという非難である。これにたいして竹風は，ナポレオン戦争後のドイツ諸国における封建的反動の極端な圧制と当時のユダヤ人迫害とをかなりくわしく説明して，こうした不自由な国に，しかもユダヤ人として生れたハイネが，こうした政治的社会的圧迫にたいして「悪口罵詈」をもって戦ったのは当然であるという。この点で竹風は嶺雲のハイネ観を継承している。第二はハイネが非愛国者であるという非難。これにたいして竹風は，当時ドイツにおいて反動の支柱であったプロイセン王政をハイネが「不倶戴天の讐敵」として憎んでいたこと，ハイネだけではなくて，かれの師友であったヘーゲルやファルンハーゲン・フォン・エンゼもナポレオン崇拝者であったこと，ゲーテ，シラーも先進国フランスに好意をよせていたことなどを説明して，ハイネは非愛国的ではなかったと弁明している。嶺雲もまたハイネが言葉の真の意味においてドイツを愛していたことを暗示して，「困難と恐痛の地なる我郷土の、汝、独逸よ、永訣」というこの詩人の沈痛な言葉を引用している。この点においても嶺雲と竹風の見解は一致している。第三はハイネが「軽佻浮薄の一遊治郎」であり，無節操であるという非難。これにたいして竹風は，つぎのようにのべている。

「ハイネは革命的精神の詩人であったのである。彼が自ら『余は剣也，余は火也』といったのはまさに自己を知れるの言と云ふべしである。」

「私は曾て嘲風君が樗牛を以て『性格の人』と断言した如く性格の人ハインリヒ・ハイネを絶叫する。」

ハイネの操守のかたさは嶺雲も強調していた。ハイネをセンチメンタル化する当時の日本の滔滔たる時流のさ中にあって，この詩人の風刺嘲罵の政治的社会的原因，愛国心，そして不屈の革命的精神について，登張竹風は田岡嶺雲のハイネ観を継承して，自分のドイツ文学史の知識にって，それをいっそう強固なものにしようとしていた。

明治四十二年（1909年）六月発行の『新小説』第十四年第六号に登張竹風は『ハイネとニイチエ』という論文を発表している。この論文で竹風は，ハイネの思想と作品とが「真に現代に生きている」ことを主張したのちに，健康状態、キリスト教にたいする態度，政治的立場，婦人にたいする関係など十項目にわたって，ハイネとニーチェとを比較して論評している。これはハイネをニーチェに近づけようとする当時のドイツの思想界の動向の影響のもとにかかれたものであって，「ハイネを以て自由党主義民主党主義の人と為すは」「笑うべき邪説である」とか，「欧羅巴思想史の上からいへば，婦人の呪咀は蓋しハイネに始まる」とかいうような乱暴な，まちがった言説をいくらかともなっている。けれども「褥墓」によこたわっていた晩年のハイネと，当時すでに歩行の自由をうしなって病苦になやんでいた嶺雲とを比較している個所は興味ふかいので，ここに引用しておこう。

「この点に就いて言へば最近の田岡嶺雲は稍ハイネ的である。蒲団の中から首だけ出して，悪魔のやうなお化けのやうな笑声を洩らして，自己の苦痛と世間の事件とを観望し批評して盛んに，気焔を吐き，絶えて痛苦を知らざるものの如く，而して，この凡人より見ては如何

にも不思議な矛盾を自ら笑って居るところなんぞ，符節を合したやうに似ている。此一事だけについて云って見ても，ハイネなり嶺雲なり何れも世間一部の人々のいふが如き小人物ではないことが分ると思ふ。嶺雲には切に静養加餐を祈って百才の長寿を保たせたいのであるが，ハイネは脊髄病で，とうとう十年も苦しんで，苦しみ通して死んだのである。」

竹風は嶺雲と親交があった。明治四十二年（1909年）に病中の嶺雲をなぐさめるために編まれた文集『叢雲』に竹風は一文を寄せているし，明治四十五年（1912年）に刊行された嶺雲の自叙伝『数奇伝』にも序文をのせている。

登張竹風は，尾上柴舟の訳詩集『ハイネの詩』の刊行された明治三十四年（1901年）に，東京専門学校（今日の早稲田大学）の出版部から『ハイ子氏　独逸宗教哲学史　完』を発表した。これはハイネの名著 *Zur Geschichte der Religion und Philosophie in Deutschland* の完訳である。登張竹風のこの訳業については，他日くわしく論評したい。些小の誤訳はあるけれども，ハイネの論旨を正しくつたえた名訳である。登張竹風がハイネの思想をふかく正しく理解していたことは，この訳著書によっても推察される。竹風のこの名訳がながらく湮滅していたのは，当時の日本の哲学界には，ハイネのこの著作をうけいれるだけの知識，ことにドイツ古典哲学についての知識が欠けていたからであろう。

ところで，田岡嶺雲の『ハインリヒ・ハイ子』が雑誌『日本人』に発表されたのは明治二十七年（1894年）の二月から四月にかけてであるし，登張竹風が帝国大学文科大学独逸文学科へ入学したのは明治二十七年九月である。それゆえに嶺雲がこのハイネ論をかいていたころには，竹風はまだ山口高等中学校で勉強していた。竹風は上京後に，おそらくは笹川臨風の仲介で，嶺雲とあい知るようになったのであろう。こうした事情であるから，嶺雲の『ハインリヒ・ハイ子』には，ドイツ文学者登張竹風は助言も示唆もあたえてはいない。むしろ嶺雲のこのハイネ論が，さきにのべたように竹風のハイネ観に決定的に作用した。

田岡嶺雲は当時の日本の数すくないドイツ文学者の援助はうけないで，独力でハイネの著作を研究して，ヒューマニティーのための戦士というハイネ像に到達した。ここで問題となるのは，嶺雲がマシュー・アーノルドの『ハインリヒ・ハイネ（1865）』を読んで，これから示唆をうけたかどうかということである。ここで，今日もなお高く評価されているアーノルドのハイネ論の概要を紹介しよう。

アーノルドはまずハイネを「ヒューマニティー解放のための戦争における一兵士　a soldier in the Liberation War of Humanitity」と規定する。近代社会は制度，先例，ドグマ，習慣，法規などからできた巨大な体系に束縛されている。この巨大な体系は時代おくれとなって，近代精神の自由な活動をさまたげる。ゲーテはこの固陋な体系に反抗して，詩人，芸術家が自分の内面の個性から作品を創造することを教えた。この意味でゲーテはドイツの近代精神の解放者である。ヒューマニティー解放のための戦士であったハイネが，ゲーテの正統な後継者である。それゆえにアーノルドは，ドイツ・ロマン派をゲーテの後継者と見なそうとするカーライルを批判する。

近代精神解放のためのゲーテの闘争は緩慢，慎重であったが，ハイネはかれの後半生を通じて，「俗物主義との生死を賭けた闘争 a life and death battle with Philistinism」をおこなった。俗物とはこの場合には，旧弊を墨守して近代精神，したがってヒューマニティーを抑圧する頑固な人々のことである。—これがアーノルドのハイネ論の骨髄である。アーノルドはこうした論旨のうえに立って，イギリスには元来，理想がとぼしいこと，晩年のハイネが共産主義の未来の勝利をしだいに信じはじめたこと，ハイネがフランスとドイツとのあいだに親密な文化関係を樹立しようと努力したこと，ハイネの抒情詩はドイツの民衆的なバラードの形態を軽快にもちいて，フランスの近代主義と明晰，そしてドイツの情緒と重量感とをみごとに統一していることなど，いくつかの重要な指摘をしている。

明治二十年代（1887－1896年）にはマシュー・アーノルドは日本の青年のあいだでかなり読まれていた形跡がある。ところで『国民之友』の『一語千金』欄にアーノルドの言葉がのせてあるという人があるので，しらべてみたが，ついに発見できなかった。(ついでにのべておくが，『一語千金』欄には，ゲオルク・フオルスターやゾイメのような，今日の日本でもあまり知られていない人の言葉がのせてあるし，附記したドイツ語やフランス語の原文には英訳がそえてあるところからみると，なにか種本があったらしい。）さきに紹介した尾上柴舟の訳詩集『ハイネの詩』にはアーノルドの名前がでてくる。その部分をここに引用しておこう。

「『マッシュー・アーノルド』，彼れを評して曰く，『ハイネ』の，詩的形式を用ふるに妙なるは，よく匹敵するものを見ず。彼れは，主として，古独逸の名詩の形式を用ふ，乃ち，吾人の歌曲の形式よりは，一層，迅速と，優美とを有せるもの是れなり。彼れの，之れを用ふるや，十分の軽妙と，容易とを以てす。而して，其固有の充実と，情熱と，及び其形式に存する古色とを失はずと。これ，蓋し，其当を得たるものならむ。」

これはハイネの詩形を論じた個所を，アーノルドのハイネ論から借りてきたのである。さて田岡嶺雲は，『ハインリヒ・ハイ子』をかくにあたって，アーノルドのハイネ論を読んで，その見解をとりいれたにちがいない。この推論の根拠をつぎにのべよう。

第一。田岡嶺雲は『ハインリヒ・ハイ子』を，アーノルドの英文のままのつぎの詩句をもっておわっている。

〈The spirit of the world
Beholding the absurdity of men—
Their vaunts, their feats—let a sardonic smile
For one short moment wander o'er his lips.
That smile was Heine! 〔for its earthly hour
The strange guest sparkled, now'tis passed away
Mathew Arnold's
On Heine's Grave.〕〉

この詩句は，1867年に発表されたアーノルドの『新詩集 New Poems』にのせてある『ハイネの墓 Heine's Grave』という232行にわたるかなりの長詩の一部分，すなわち，206－211行である。原文では〈Heine's Grave〉という題名であるが，嶺雲はこれを On Heine's Grave とあらためているし，原文ではnow'tis pass'd away となっているが，嶺雲はこれを now'tis passed away とかきあらためている。

シャープはかれのハイネ伝の結論の部分で，アーノルドに二度も言及している。そして，嶺雲の引用している『ハイネの墓』の同一の詩句を，「ハイネについて，これまでにのべられた最良の定義 the best definition of Heine, that has yet been said」としてやはり引用している。けれども，シャープはこの詩の206行から210行の前半（つまり前掲の英詩の括弧の前までの部分）を引用しているだけである。またシャープは，この詩句の出典である『新詩集』の名も『ハイネの墓』という詩の題名もあげてはいない。

それゆえに田岡嶺雲が明治二十六－七年（1893－94年）にすでに，シャープとは別に，アーノルドの『新詩集』を研究したこと，そのなかに『ハイネの墓』という詩を発見したこと，そして自分のハイネ論に，シャープのハイネ伝にはなかった一行半，すなわち210行後半と211行を，さらにまたこの詩の題名を On Heine's Grave としてかきくわえたことは確実である。

第二。嶺雲のこのハイネ論は周倒な用意のもとにかかれた。嶺雲はアーノルドの『新詩集』を読んだのであるから，おなじアーノルドの『ハインリヒ・ハイネ』も研究したにちがいない。さきにのべたように，アーノルドは，ハイネがヒューマニティー解放のための戦士であることを主張している。そのハイネ論の冒頭でまず，この詩人が a brave, yet a brilliant, a most effective soldier in the Liberation War of Humanity であることを強調し，結論においてあらためて，〈He is not an adequate interpreter of the modern world. He is only a brilliant soldier in the Liberation War of Humanity.〉と断定している。田岡嶺雲はアーノルドのハイネ論から，ハイネこそゲーテの正統の後継者であるという思想史的文学史的考察やその他の重要な指摘はとりあげなかったけれども，ヒューマニティー解放のための戦争における勇敢な戦士としてのハイネという思想をうけいれて，これを自分のハイネ論の骨子とした。

自由民権運動の一大策源地であった土佐で少年時代をすごし，内村鑑三から「偽君子になるな」と教えられ，資本主義確立の途上における当時の日本の細民の困窮をまのあたり見てきた田岡嶺雲は a brave soldier in the Liberation War of Humanity というアーノルドのハイネへの評言につよい感銘をうけたにちがいない。この言葉によって自分の生涯の進路はきまった。自分もヒューマニティー解放のための勇敢な戦士になろう。そのためにはまず，やはりその道をすすんで，しかもそのために非常な苦難を戦いぬいたハイネの生涯をくわしくかいて，自分の覚悟をきめることにしよう。――こうした動機から，田岡嶺雲の『ハインリヒ・ハイ子』はかかれた。このばあいにアーノルドのハイネ観が中心となって，シャープのハイネ伝は具体的な説明のために利用されただけである。

そして、たしかにこのハイネ論をかくことによって，田岡嶺雲の生涯の進路はきまった。かれはヒューマニティー解放のための一戦士として，明治時代の日本の支配階級と闘争をつづけて，革命的民主主義ないし社会主義にはてしもなく近づいていった。明治二十八年（1894年）に創刊した雑誌『青年文』によって田岡嶺雲は日本にリアリズムの文学を建設しようと努力した。ヒューマニズムを実現する文学はリアリズムでなければならないからである。かれは御用文学になりやすい功利立義の文学と，世態人情の描写にのみとどまっている硯友社の文学を排撃した。当時の日本の社会的現実の矛盾をただしくとらえている川上眉山の観念小説や樋口一葉の『たけくらべ』を正当に評価したし，泉鏡花，広津柳浪らの悲惨小説あるいは深刻小説を歓迎した。二葉亭四迷を中心とする大我居士，松原二十五階堂，横山源之助らの貧民問題研究に心からの讃意を表して，かれ自身も，小説家は細民の生活をえがけと力説した。世俗に超然として人間性を凝視していた幸田露伴を尊敬した。田岡嶺雲のこうした努力は無駄ではなかった。泉鏡花の『風流線』，木下尚江の『火の柱』，『良人の告白』などの発表された明治三十六，七年（1903—1904年）に，近代日本のリアリズム文学は一応の頂点に達したからである。

さて最後に，明治二十九年（1896年）に雑誌『太陽』に発表された『厭世詩人ハイ子』を検討しよう。この論文は，これまで研究してきた『ハインリヒ・ハイ子』をいくらか書きあらため圧縮したものであるが，いくらかちがっている点もあるので，両者の相違をまず明示することにしよう。

(1) 『厭生詩人ハイ子』のなかのつぎのような史実あるいは逸話の記述は『ハインリヒ・ハイ子』には見いだされない。

(a)「ハイ子が家にも一人の鼓手宿りぬ，いと気軽き男なりければ，ハイ子が己の家に在る時は常にこれと相戯れたり，此男もと独逸語を解せねば，大鼓の調もて其意を通ずるを常とし，例令へば Le liberte（自由）という語には，マルセイユの歌の調を鼓つが如くするなり，嘗て独逸といふ語を通ぜんとて，見世物小屋にて犬を踊らする時の調なる，Dumm，Dumm（痴呆の義）をうちたりしかば，ハイ子は大に憤りたれども，意はよく通ずるを得たりき。」

この逸話は『観想，ル・グランの書』の第七章にある。

(b)「又このゼッフェンの家は代々創手なりしかば，相伝えたる大剣あり，一日其母も家に在らでゼッフェンは独り留守しける折，ハイ子は其刀を見んことを求めしに，ゼッフェンは手もたゆげに持出でつ，例の古謡を口吟めば，ハイ子も同じ口調に『抜放つ剣に我は接吻せん』といひ，直ちに『幼なきゼッフェンに接吻せん』と語をつぎつ，琁と相抱きて其朱唇に接吻せり。この時よりぞハイ子は恋てう焔を吸ひそめたる。」

この逸話はハイネの晩年の作品『回想』のなかにある。

(c)「此一巻その巻中の詩，Die Minnesänger の一句以て其評にあつるに足るべし，曰く『想者是駒，技者是鎧，歌者是剣』と。」

この一巻とは詩集『歌の本』のことである。Die Minnesänger はこの詩集のうちの「譚詩

調」の第十一の詩である。

(d)「翌年の夏行旅画記（Reisebilder）第一巻を発刊して，直ちにノルデル子ーなる海浜に避暑しぬ，或は日代高くさしのぼりて其光海を懐けば，涛は細語を天にささやく時，岸辺を行きつ戻りつ，半夜を過ごす折もあり，或は細雨蕭々，軒の玉水音静かに波の打寄する音さへうちしめりて聞ゆるに，蜑が家の団欒に入りて，炉辺に昔語をきく夕もあり。朝より夕に至るまで事として心に感じ物として情に触れぬはなければ，其精神昂つて酔へるが如く，神来って詩を賦すれば語々皆玉に，興到って文を為れば句々皆珠に，其集まって一巻をなせるもの、実にノルデル子ー（Norderney）是れなり。」

これは1826年にハイネがノルデルナイ島に避暑して，そこで『旅の絵姿』第二巻にふくまれている散文『北海』第三部ができあがったときの情況をえがいた文章である。

(e)「ハイ子は此地に来りてより，切りに書を故国の新聞紙に寄せて独逸を罵りしかば，其政府は彼を危険なる革命党なりとし，堅く其書の印行を遏め，又識者よりは愛国心なき卑劣奴なりとして擯斥されたり。」

これはフランスへ亡命したハイネがドイツの新聞雑誌を通じておこなった文筆活動についてのべた文章である。

(2)『厭世詩人ハイ子』のなかのつぎのような詠嘆的な文章は『ハインリヒ・ハイ子』には見いだされない。

(a)「嗚呼生きたるもの食なかる可からず，人間生きんが為には，則ち其長所たるものをも犠にして、其麺包に殉せざる可らざるに至ては，人間たるもの生くること畢竟何の要ぞ。」

(b)「且つや天才者なるものは多く不羈豪放，彼それ生前天上の安楽を猶心に忘れざる歟，地上の羈絆彼において平かならざること多し。」

(c)「古来文士貧多し，彼等蓋し阿堵を視る瓦泥に似たり，之を重むせすして寧ろ之を賤む，手に徒て即ち空し，彼ら吝むことを恥とするなり。」

(d)「ハイ子の詩知らず何の所よりか其奥秘を授かれる。嗚呼，彼は詩人として生れたるものなり，天之に興ふるに詩人の才を以てし，更に與ふるに詩人の窮厄を以てす。天のハイ子に於ける篤からずとせざるなり，ハイ子にして窮厄なくば，未だ知らず其詩，此の如く生気あり，熱血あり，情熱あるを得しかを。」この (d) の文章こそ『厭世詩人ハイ子』の結論である。

(3)『厭世詩人ハイ子』では，ヒュマニティーという言葉がすべて他の言葉にかきかえられている。これは重要なことであるから，『ハインリヒ・ハイネ』のなかの当該の個所と対照して示しておこう。

(a)「彼自らの語を借りていへば，彼は自らを聖虚の一勇将として，ヒューマニテーの為めに戦はむと決心せしなり。」（『ハインリヒ・ハイ子』）

「彼が語を借りて之をいへば彼は今や自らを『聖霊の一勇士』として戦はんと決心せるなりき。」（『厭世詩人ハイ子』）

(b)「ハイ子は人間が其相伝的大敵たる死と戦ふに当ての，神虚的雄大の状を想起し，坐ろに其客心を愴ましめぬ，その唯に一好詩人としてよりはむしろヒューマニテーの一兵卒として知られむとの決心は実にこの瞬時の感慨に職由したるもの丶如し。」(『ハインリヒ・ハイ子』)

「人間と，その相伝の大敵たる死との衝突より生ずる心霊的雄壮を想起して，彼がその啻に一好詩人たらんよりは，寧ろ人道の一兵士たらんと欲するの念は，此時に萌せるに似たり。」（『厭世詩人ハイ子』）

(c)「彼を以て，愛の心なしといふ莫れ，彼は愛の為めに活きたり，彼は愛の為めに泣き，愛の為めに笑へり，彼は神を蔑視するまでに人間を愛せり，人世を厭ふまでに人生を愛せり，其墳墓の地を捨ててまでに，自由を愛せり，彼は自由の為めに戦ひ，ヒューマニテーの為めに戦へり，彼は全世界の人間を壓抑の羈靮より釈放せむことを期せり。」(『ハイリンヒ・ハイ子』)

「偏量の所謂愛国者なる者よ，彼が故国を去りたるを尤むる勿れ，詩人の眼中寧ろ人間あって国民なし，全世界あって一国なし，彼は寧ろ人道の為めに闘へるなり，寧ろ自由の為めに戦へるなり，天才者は天の如し，敢て私偏せず，彼は一国の民として生れず，世界の民として生る，彼は全世界を其羈絆より脱せしむるの天職を知るのみ。」（『厭世詩人ハイ子』）

このように両者の相違をあきらかにしたうえで，嶺雲のハイネ論がどのように変化したかを見ることにしよう。

第一。『厭世詩人ハイ子』が発表されたのは明治二十九年（1896年）の十一月から十二月にかけてであった。登張竹風は明治二十七年（1894年）九月以後に上京して，帝国大学文科大学独逸文学科で勉強していた。田岡嶺雲はおそらく笹川臨風を仲介として，竹風と交際して，この新進のドイツ文学者からハイネについても，いろいろな知識を得たであろう。それゆえに，さきに示したように，『ハインリヒ・ハイ子』にはかかれていない，ハイネについての文学史的事実や逸話が五個ほど『厭世詩人ハイ子』にはつけくわえられることになった。

第二。明治二十八年（1895年）七月に発表した『詩人と厭世観』という論文において，田岡嶺雲は「唯詩人は感す，理によらす，信によらす，唯其感するままに感するのみ，四囲の境遇の彼に影響するもの実に多し」とのべて，詩人は社会的現実を感情的にのみ把握することを主張する。そしてバイロンとハイネについて，つぎのようにかいている。

「バイロンや，ハイ子や，彼は其安慰の地を得す，彼は世を悲しみ，世を憤り，世を罵り，世を嘲り，狂ひに狂ふて狂死に死せりき，彼等二人は真に詩人的なりき，彼は深く思う能わす，信する能わす，唯其情の激するに任せ情の奔逸に任せたりき，二人者は実に十九世紀の初頭に立て，詩人として此十九世紀と戦ひぬ。」

明治二十七年（1894年）に発表された『ハインリヒ・ハイ子』においてヒューマニティー解放のための勇敢な一戦士であったハイネが，ここでは，感情的にのみ社会的現実を把握して，感情の奔逸にまかせて世間に反抗する慷慨家になっているようだ。これは哲学者は思惟し，宗教者は

信じ，詩人は感情的に直覚するという田岡嶺雲の根本的な考え方から生じた結論である。ハイネの本領は詩人である。詩人は感情的にのみ直覚する。そこでハイネは感情的にのみ社会的現実を把握するということになった。ここで詩人の「感情的な把握」というのは，今日の言葉でいえば詩的芸術的創造の基礎となる体験のことである。とにかく嶺雲はこの『詩人と厭世観』という論文では，社会批評家としてでなくて詩人としてのハイネを前面におしだしている。

『厭世詩人ハイ子』においても，題名のように詩人としてのハイネが前面にでている。この論文ではヒューマニティーという言葉はなくなってしまったが，「聖霊の一兵士」とか「人道の一兵士」とかいうのは，ヒューマニティーのための戦士のことであるから，ヒューマニズムのためのハイネの闘争というアーノルドのハイネ観の根本思想は維持されている。けれども感受性のゆたかな詩人ハイネに力点がおかれて，「天才者の不羈豪放」，金銭を蔑視する文人の高潔などが詠嘆的な口調で力説されて，生活が困窮すればするほど，いっそう情熱のこもった詩ができるという詩人殉難説が結論となっている。これは嶺雲のハイネ観が屈折したとか後退したとかいうのではない。ただ嶺雲がハイネの本領を詩人として見ようとしたから，おこったことである。

與謝野鉄幹の『人を恋ふる歌』のなかの「バイロン，ハイネの熱なきも」という言葉は今日も有名である。明治三十三年（1900年）九月発行の『明星』第六号の新詩社詠草のなかには，つぎの和歌がある。

「荒波のくだくる磯にいくたびか　ハイ子抱きてひとり泣きけむ」

おなじく明治三十三年十一月発行の『明星』第八号の新詩社詠草『大我小我』のなかには，つぎの和歌がある。

「ハイ子ーは女女しきおのこ恋に泣きて，おぞやこの世をうらみていにぬ」

このようなハイネのセンチメンタル化，失恋と厭世の詩人としてのハイネ像の成立に，田岡嶺雲の『厭世詩人ハイ子』は多少の寄与をしたにちがいない。

田岡嶺雲はおなじ明治二十九年一月に雑誌『青年文』に『ヒューマニテー』という小論文を発表している。ここで嶺雲は，近代日本の文明がきわめて悲惨な貧民生活をうみだしたことを力をこめて説明して，文学者はいたずらに恋愛のみをえがくことをやめて，これら貧民の舌となり筆となって，かれらの窮状を表現して世にうったえるべきであると主張する。こうした努力をすることによって，文学者はヒューマニティー解放のための戦士になれというのである。こうしたヒューマニズムを嶺雲は死ぬまで守りつづけた。かれの生涯はヒューマニティー実現のための不断の闘争であった。

なおこの論文の完成にあたって，田岡嶺雲研究者である西田勝氏からいくつかの示教をうけて，それを参考にしたことを，心からの感謝をもってここにしるしておく。